

令和2年7月21日 中央新幹線に係る林道の視察
森下祐一静岡大学客員教授 囲み取材記録

(記者)

最初に事実関係を確認させていただきます。いつ以来の現場視察になりますか。

(森下教授)

はい。去年の知事視察に同行して以来です。

(記者)

現場を実際に見られての印象についてお願いします。

(森下教授)

知事がおっしゃった通りで結構ひどい。道も含めてひどい状態にあると思います。

(記者)

現地視察での所見等を専門部会の先生方と共有されるというお考えはありますか。

(森下教授)

それは言うと思いますけれども、ただ、専門部会或いは有識者会議は科学的に議論するという場ですので、直接の議題にはならないとは思っています。

(記者)

私も先月の視察に同行させていただいておまして、その時はこの幅まで水が一切来ていない状況で、近々の大雨があった影響であることは重々承知なんですけれども、かなり水量が豊富な印象を受けました。そのあたりはどうお考えでしょうか。今日の映像だけを見た人にとっては、「大井川って水多いよね」という印象になりかねないのかなと思ったりするんですけれども。

(森下教授)

雨が降れば多くなりますよね。

(記者)

トータル的な水の無くなる懸念とか、相対的に見たときに毎秒2トンというのがそんなに多くないのではないかとか、そういう議論にまで踏み込んできた中で、実際に現地をご覧になられて。

(森下教授)

そういう印象ではなくて、実際にデータとしてその河川水量というのは渇水時、それから水の多い時にどれくらいというのは過去のデータがあるわけですからね。それに比べて2トンというのはかなり多い量ということになります。

(記者)

有識者会議の先日の方向性は、中下流域の影響が少ないんじゃないかということで、その後、科学的な議論する場なのに、JRが出してきたデータに基づいて、そういう影響が少ないという方向付けをするのは、委員の1人として妥当だと思いますか。

(森下教授)

議事の中では、そういうことで一致したという事実は全くございません。後の取材の中でそのような話がでてきたんだと思います。議事の中ではですね、第4回目の主なテーマは、水収支解析で地下水が1年、2年とどのように減っていくかということ議論したんですね。その時に、中下流域の話になって、委員の中からですね、中下流域には影響が少ないんじゃないかという意見が出たんですね。ところが、現在の解析はですね、上流域だけの解析なんですね。で、県の専門部会でもそのデータが出たわけですけども、中下流域にどのように影響するかというデータは有識者会議に追加のデータが出たわけではないわけですね。ですから、その有識者の意見ですね。影響が軽微ではないかというのは意見だと思います。それを裏付けるための解析をするためには、上流、中流、下流を含めた範囲での解析が必要ですし、また、私は会議の中で言いましたけれども、水の酸素水素同位体を測定したり、あるいは、不活性ガスを測って水の滞留時間みたいなものも。JR東海の資料の中にはそれをやりますって書いてあるんだけど、そのデータが出る前に、その方向性っていうのが出るとしたら、それはいかがなものかということ私を私は発言しました。

(記者)

科学的な議論の場だとしたら、そのJRのデータが科学的に正しいかどうかを評価するのが有識者会議の務めなんじゃないかなと思うんですけども。

(森下教授)

はい。ですので、出されたデータについては評価をしているんですけども、中下流域については、それを評価できるようなデータではないということですね。現在の出ているデータでは。追加のデータが必要なわけですけども、それなしで方向性が出るということはありません。

(記者)

それでいくと、なおさら座長のまとめ方はそれでいいのかなと思ってしまいますけれども。

(森下教授)

そうですね。先ほど知事がおっしゃいましたけども、3回目まではですね、有識者会議の専門家の委員の皆様方が、この大井川の事情に慣れるというような形の質問が多かったわけで、実質的な議論は第4回目だと思うんですけども。その中でですね、現在のデータを解釈するとうようになりますということだったんですね。ですから、その中下流域がどうかっていうことを目的にして取ったデータではないわけです。今あるデータですね。

(記者)

今の続きなんですけど、先生がおっしゃった、上流域の指標データの同位元素を含めて、下流域の地下水との同位元素について、今、当然JR東海は調査分析、分析調査していますし、次回で多分出てくるんじゃないかなと思うんですけど、それを見た場合に、先生はOKを出すのでしょうか。

(森下教授)

酸素水素同位体で何がわかるかというと、水の涵養標高がわかるわけですね。降水の酸素水素同位体というのは、標高が高くなっていくと軽くなっていくんですね。ですからどこから来た水かということがわかる訳なんですけれども、それはただのデータなんです。それをもって、上流水が中下流域に影響を及ぼすのか及ぼさないのかと言うためには、科学的なストーリーが必要です。

(記者)

だから今回の沖先生とか、扇状地には降水がほとんどだということと、渇水期にも地下水の影響がほとんどないって言うような、それが科学的だと思うんですけども。

(森下教授)

もうすでに一部、同位体のデータがあるわけですね。それで河川に近いところは、上流から来たことがわかっていて、少し離れると影響があまりないってということも一応わかっているんですね。

(記者)

そうなんです。ただ、今回先生の方もその同位体の調査結果を出せと仰っていましたから、それを見たらいいのかなと思ったんですが、そうでもないってことですね。

(森下教授)

データはあくまで事実なんです。だからそれをどういうふうに使って何を言うのかってところが問題なわけですね。私、実はそれを次の時に聞こうと思うんですけども、そういう戦略があるかどうかですね。

(記者)

わかりました。

(森下教授)

つまり、同位体が幾つであったからいいけれども、幾つだったらよくないとか、そういうものではないわけです。例えば、涵養標高が幾つということが出たとしても、それははっきりでるかわからないですね。水が混ざっている可能性があるわけですから。

(記者)

ちょっと私もわからないんですけど、この議論がどこまで。先ほど方向性とか、向こうは作りたい、向こうというか有識者会議は作りたいということをやっている。科学者がどこまで言えるかっていうことは、やはり限界があるんじゃないかなと思うんですけど。

(森下教授)

一番確かなのは、上流中流下流を含めて、大井川水系の河川水、表流水と地下水を合わせて、その解析を行うということですね。酸素水素同位体は、一つの手がかりを与えるにすぎないと思っています。

(記者)

わかりました。

(記者)

最初の質問と少し重なるんですけども、視察をされた、着目されたポイントとその評価を、森下先生の口からお願いします。

(森下教授)

今日は知事に同行ということで、科学的なポイントは今日はないので、それとの関連性は特にはないです。